
Daylight

美波可奈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Daylight

【Nコード】

N4953Z

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

春加先輩が栄光をつかむまでの話

俺を呼ぶ声 1

「春加先輩。居ます？」

「ああ？」

俺がトントンと戸を叩くと。

いつもの不機嫌な声が聞こえた。

「ああ？じゃないですよ。

入りますからね。」

ここは今流行りのルームシェアの一室で。

俺と春加先輩とは高校時代からの付き合いで。

今は二人とも同じ芸能事務所の研修生で。

俺は裏方の音声とかそっちの方専攻で。

春加先輩は一応これでも真面目に俳優目指してた。

「…何してるんです？」

「…何なわけ？」

いきなり入ってきて。」

つてか春加先輩って俳優の素質ないんだよな。

俺はいつも思う。

「…何な訳ってあなたが言っただけでしょ？」

今日打ち合わせがあるって。

自分が台本読みあさると時間忘れるから声をかけて欲しいって。」

俺はいつもため息をつく。

けど。
俺が唯一。

この人って素質があるかと思う瞬間がある。

それは。

「……!!」

悪い。マジ忘れてた!!
英里^{えいり}マジ助かったわ!!」

俺の苗字を呼ぶときの独特のイントネーションと声だった。

俺を呼ぶ声 2

「悪い！！すっかり忘れてた！！」

桃子が来るっていつてこっち向かってるらしいから。

英里お前頼むな！！」

「はああ？

春加先輩まだアレと付き合ってたんすか？

いい加減趣味悪い。」

「趣味悪い言うな！！」

腐れ縁みたいなもんなんだから！！」

「ああああ。春加先輩！！

台本！！」

そう言って俺は先輩を送り出した。

桃子というのは先輩の彼女気取りの女で。

いい加減趣味の悪い先輩は断るのが苦手で押しに押されて。

押しかけ女房みたいな奴に捕まってた。

それはおれより2つ下の女だった。

「春加先輩！！」

無遠慮なノックに勝手に合鍵を作った奴は。
勝手に入ってくる。

ってか。

ルームシェアは俺と春加先輩と後もう2人主がいる。

全員男で。

全員干渉し合わない。

それがルールで絶対だ。

「…桃子。」

「ちよつと英里君!!」

あなたまだ先輩に付き纏ってるんじゃないでしょうねえ!!」
言うに事欠いてこの女。
付き纏うって何なんだ。

「あたしのダーリンはどこよ!!」
ダーリンって面か。

俺は怒る気も説明する気も失せて。
何だか脱力した。

「春加先輩は仕事だつて。」

「…嘘よ!!」
だってさっき電話通じてあたしに言ってたわよ!!」
今日は時間あるから映画連れてってくれるって!!」

…先輩。

何でこんな女俺に託すんすか(´;ω;｀)

「今日はトムマレーの栄華解禁なのに！！

あたし大好きなのに！！」

お前の趣味は聞いてねえよ！！

「桃子…。」

「ちよつと英里君！！

あたしを気安く桃子って呼ばないでくれる？

あたしを桃子って呼んでイイのは春加先輩ただ一人よ！！」

はいはい。

俺はいい加減疲れて。

「飯田さん。今日は俺がお供しますから。」

些かげんなりして桃子の腕をつかんで半ば強制的に部屋から連れ出したんだ。

全く先輩のせいでとんだトバッチリだ。（怒）

俺を呼ぶ声 3

映画も俺は結構観る方だとは思う。
まあアクションやスパイ映画が多いとは思っけど。

だけど目の前で広がる世界は俺の理解を超えていた。
ってか。

この飯田桃子って女は俺の予感的中の図々しい奴で。
ただ春加先輩の金目当てなわけ。

それがハッキリと判った。

今まではたかってるのかただ本当に春加先輩のことを好きなのか判
らなかったんだけど。

今日でハッキリ判った。

映画を自分の金で観るのはシャクでプライドが許さないから。
大して好きでもない俺にでもたかる。

寧ろ相手は誰でもいいってことなんだ。

ちよっと自分より背が高くて。

ちよっと見目が良ければ。

誰でも。

目の前ではトムマレーとかいう外人が次々と成功を収めていく。
在り来りな映画で。

俺に言わせればそれは作り話だからそれでいいけど。

現実はそのなに甘くないって。

「…飯田さん。」

何が楽しいんです?」

俺はその場で。

聞いてみたんだ。

納得のいかないことをそのままにできるほど俺は大人じゃなかったから。

「…俺とか。」

春加先輩に貢がせてあなたは恥ずかしくないんですか?」

飯田桃子の横顔に問いかける。

「…あなたは世間では結構イケてる方だと自分で言ってますんですけど?」

「…何よ?」

「俺に言わせれば飯田さんは只春加先輩を連れて歩く人形だとか。貢がせるのに丁度いいとか。」

そう思ってたんでしょ?」

我ながら放つとけばいいのにと心の声がするけど。

俺にはこの飯田桃子を赦すほどに大人じゃなかったんだ。

「…だったら何だって言うのよ?」

あたしを嫌いなら先輩だってそういえばいいでしょ?

いい加減フツたらいいじゃない。」

「…あの優しい人がそんなのできるわけないって知ってますよね?」

知ってて言ってるんですよ？」

女相手に熱くなるのなんか馬鹿だと俺は思ってたけど。
マジで叩きたくなった。

「だから？」

「…先輩は全部知ってますよ。」

あなたに振り回されてることも。

あなたに貢がされてることも。

だけど俺が口を出そうとするとあの人は言うんだ。

桃子は可哀想な奴だから仕方ないだろうって。」

飯田桃子は俺の頬を思いっきり叩いたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4953z/>

Daylight

2011年12月19日21時45分発行